

論文審査結果の要旨

本研究は、近世筑前福岡藩の国焼茶陶としてしられる高取焼について、桃山様式の作例から江戸時代の新様式の作例へと短期間に急展開していく造形上の変遷過程とその歴史的背景を、多角的な条件の検討と総合的な分析をとおして解明し、従来の見解に大きな修正を迫る労作である。

一般に「古高取」と「小堀高取」という呼称で区別される新旧様式の交替について、従来の研究は、高取八山を棟梁とする渡来陶工が江戸初期の数寄者文化の体現者であった小堀遠州の直接的な指導を受けて和漢を融合させた新しい茶陶を生み出したと説明するのみであったが、それに対して著者は、数寄者であった二代藩主黒田忠之が、御用窯として運営される高取焼全般の製陶に関与した観点をはじめ導入し、忠之関係の判物を含む史料を丹念に読み解きながら、その実態を時代相に即して論述している。著名な茶器の収集、邦人制作集団の召し抱えと指導、内ヶ磯窯から白旗山窯へと移りかわる中心的な窯の経営統制と沿革、福岡藩に有縁の大徳寺塔頭孤篷庵に結びつく小堀遠州や江月宗玩といった上方の中心的な数寄者との交流と新趣向の摂取、寛永年間末年から正保年間にかけて白旗山窯で「横嶽」茶入に代表される新様式が完成する過程に至るまで、凡そ高取焼を形成し存立せしめた全ての局面で、忠之がたんなるパトロンの役割を超えたオルガナイザーとして積極的に加担していた実態を明快に実証した功績は大きい。さらに忠之が上出来の高取焼を二代将軍秀忠へ上覧し、また酒井忠勝らの幕府要人へ贈与した背景に、幕藩体制確立期の不安定な政治状況の中で、細心の配慮の品として、時として筑前藩が直面した試練を打開しようとする政治的戦略が重なっていたとする見解は、芸術と政治との密接な関係を照らしだして興味深い。

上述の論点にあって、新知見は枚挙にいとまがない。とりわけ、新出の資料『高取歴代記録』(高取家本)を提示し、朝鮮からの渡来陶工に加えて、唐津焼の生産にかつて従事し茶人としての活動もしられる五十嵐次左衛門を中心とする邦人陶工集団が召し抱えられ、内ヶ磯窯以降の製陶に参加していたことの指摘は大きい。著者は、五十嵐一派の活動を視野に入れることで、高取八山が一時期、山田村に蟄居していたにもかかわらず、高取焼の生産が内ヶ磯窯から白旗山窯に至るまで一貫し、忠之の意向を受けて短期間における技術革新と様式の転換を遂げることが可能であった理由を矛盾なく説明し、近年、京都や大阪で唐津焼と見紛う内ヶ磯窯の製品が出土している背景にも、五十嵐一派の独自の活動を見出している。

本研究の卓越した観点は、一方で、高取焼の茶入を中心とする徹底した作品の触知的な観察と分析に支えられている。有力な茶入と近年の窯址から出土した陶片資料をもとに、高取焼の製陶段階における轆轤の回転方向や糸切りの方向を判断し、技術革新の過程と様式変遷を有機的に結びつける総合的な観点から、理路整然と生産窯を特定し、4期にわたる茶入の編年を正しく跡づけていく手法を確立したことは、陶磁史研究において特筆に値する貢献となる。

総じて、本研究は、筑前高取焼が、江戸における政治権力の中核と上方の文化伝統の中心の双方を視野に入れた藩主忠之の積極的な関与と、その意向を実現する渡来陶工と邦人陶工の協働によって、類稀な茶陶として完成度を高め、名実ともに一流ブランド品としての地位を獲得した歴史を見事に論述し、高い評価に値する。本稿によって、今後、西日本における陶磁史研究の視野は格段に広められ、和漢の美意識を高い水準で統合する高取焼の完成には、絵画史における狩野探幽の画業に匹敵する美術史的・文化史的意義が認められよう。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。